The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	グローバル外国語教育に不可欠な「高度汎用力」の原点 : interactive competenceを支える「スクライビング」実践報告
Author(s)	林田, 雅至; 印南, 敬介
Citation	Co＊Design. 2018, 3, p. 79-85
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67895
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

グローバル外国語教育に不可欠な「高度汎用力」の原点 interactive competenceを支える「スクライビング」実践報告

林田雅至（大阪大学COデザインセンター）

ポルトガル語圏文献学・キリスト教図像解釈学・宗教民俗学を専攻する学際研究者（ポルトガル語学・文学）。ポルトガル・リスボン科学アカデミー（外国人会員）。

印南敬介（一般社団法人ナレッジキャピタル）

双方向外国語運用能力コミュニケーター（コミュニケーション・デザイナー）。2012年度大阪大学外国語学部卒業、2013年株式会社スーパーステーション入社（一般社団法人ナレッジキャピタル勤務、現在総合プロデューサー首席補佐[1)]）。

The Skill of *Scribing* to acquire Linguistics Interactive Competence, the starting point of the higher Applicability indispensable to the Global Foreign Language Education

Masashi Hayashida (Center for the Study of Co* Design, Osaka University)

Keisuke Innami (Knowledge Capital Association)

印南は、ナレッジキャピタルのコミュニケーター業務や国際連携業務を通じて、外国語交渉の現場で経験を積み、双方向言語運用能力（interactive competence）を習得した。多言語・多文化コミュニケーションの媒介役には、外国語運用能力（語学力）のみならず、信頼関係を醸成するための「寄り添い」が、これまでの「通訳」以上に必要となる。そのために、母語のコミュニケーション能力、とりわけ傾聴能力・文脈理解能力・演繹的表現力が不可欠である。これらの能力を訓練する手法として、聴き取った内容を瞬時にまとめて筆記表現するスクライビングを提案するものである。

キーワード ―― 言語学イノベーション、双方向運用能力、スクライビング

Keyword ―― Linguistics Innovation, Interactive competence, Skill of Scribing

1　はじめに「ナレッジキャピタル」ありき

2013年4月26日、JR大阪駅・北側に位置するうめきたエリアに、商業施設・オフィス・ホテル・分譲住宅が一体となった複合施設・グランフロント大阪がオープンした。その中核施設であるナレッジキャピタル（代表理事・宮原秀夫［元大阪大学総長、元情報通信研究機構（NICT）理事長］）は、企業人、研究者、クリエイター、そして一般生活者が行き交い、多様な「知の交流」によって新しい価値を生み出す「知的創造・交流の場」である。ナレッジキャピタルには、大小のオフィス、会員制の交流サロン、最先端技術が体験できるラボ、未来のライフ・スタイルを提案するショールーム、ビジネスからエンターテインメントまで幅広く利用できる多目的シアター、イベントスペース、コンベンションセンターまで、人が交流し、新たなプロジェクトを生み出し、そして情報を世界に向け発信するための様々な施設と機能が揃っている。

印南はナレッジキャピタルの開業時から約3年間、人と人、人とコト、人と情報をつなぐ専門スタッフ「コミュニケーター[2)]」として勤務してきた。コミュニケーターは、ナレッジキャピタルを訪れる多様な人々と接し、交流を促しながら、出会いを創出し体験を深める働きかけをおこなう。また、最先端技術を体験した一般生活者の声や反応を収集し、参画企業や研究者にフィードバックする役割をも担う。言わば、知的交流のための触媒なのである。学際的な知の交流を促し、専門家と非専門家の溝を埋めるコミュニケーション媒体として、この仕組みは社会においても新しい取り組みだと言える。同時に、多言語・多文化「人材育成」の観点からも、ますます多様化する社会で、高度なコミュニケーション能力を兼ね備える「イノベーティブ人材」の育成に寄与するものと考えられる。

2　双方向言語運用能力（interactive competence）の花咲く活躍の道筋を辿る

外国語（印南の場合は英語）の「双方向言語運用能力（interactive competence）」の涵養には、様々な国際舞台での実地訓練（あるいは「修行」という言い方をしてもよい）が強力な基礎となっている。2014年10月、ナレッジキャピタルは「新世代ネットワークの実現にむけた欧州との連携による共同研究開発および実証・課題A：大規模スマートICTサービス実証基盤を用いたアプリケーション実証（FESTIVAL）[3)]」の中核拠点に選ばれた。これは、総務省所管のNICT（独立研究開発法人情報通信研究機構）より委託を受けた日本の研究機関と、欧州委員会より委託を受けた欧州の研究機関による国際共同プロジェクトで、将来のスマートシティ構想の実現につながる研究でもある。同年11月、スペイン・サンタンデール市で開催されたプロジェクトのキックオフ・ミーティングに、印南は、ナレッジキャピタルの代表として出席。ナレッジキャピタルのコンセプトや施設の概要を説明し、欧州側の注目を集めた。それ以降、プロジェクト担当者として業務を遂行してきたのである。プロジェクトは2017年9月末日を以

て所定の研究期間満了を迎え、11月の最終報告会および審査会の席上、3年間の成果が報告された。

2015年9月、開業以前から親交の深かった、メディアアートの世界的拠点「アルスエレクトロニカ」が主催する「アルスエレクトロニカ・フェスティバル[4)]」に参画し、印南はその企画・運営担当者として、ナレッジキャピタル全体の訴求コンテンツの制作アドバイザーと、現地スタッフおよび来場者に対して専門技術の通訳・翻訳を伴う媒介役（コミュニケーター、多言語コミュニケーション・デザイナー）を務めたのである。

その後、彼は、総合プロデューサー補佐に就任（昇格）し、国際連携事業を積極的に展開するナレッジキャピタルにおいて、数々の国際プロジェクトを担当した。2016年6月、フランスのパリ郊外に位置するアンギャン=レ=バン市のデジタルアートセンター（2015年9月に相互連携に関する覚書を締結）が主催するデジタルアートの祭典「バン・ニュメリック（Bains numériques）[5)]」に出展した際には、企画・運営に携わる傍ら、外部機関やアーティストとの商談・交渉も担当したのである。

2016年9月、「アルスエレクトロニカ・フェスティバル」に2年連続で出展し、ナレッジキャピタル独自企画イベントである「こたつ会議[6)]」を現地で披露した。またその直後、印南は、イスラエルの「ヤング・リーダーシップ・プログラム[7)]」に招待・参加している。これはイスラエル政府が推進する国家政策の一環で、日本の若年層をイスラエルに招待し、相互理解・交流を図るプログラムである。ルツ・カハノフ駐日イスラエル大使がナレッジキャピタルを視察訪問した際、大使に英語でプレゼンテーションを行い、館内を案内するなどの機会を得たことが契機となったのである。

同年12月には、日仏間における科学技術イノベーションの交流促進を掲げた国家間プロジェクト「日仏イノベーション年」の閉幕イベント[8)]を開催した。この間に、フランス政府の国立研究機関「フランス原子力・代替エネルギー庁電子情報技術研究所（CEA Leti）」をはじめとする複数機関と相互連携に関する覚書を締結した[9)]。スマートシティ分野における国際的イニシアティブ設立の意向を確認した。

2017年3月末時点で、ナレッジキャピタルが連携している国際的機関は10を数え、国際連携事業は拡大の一途を辿っている。2017年3月、開業4周年を記念して主催した「アワードシティ・ウィークエンド[10)]」では、その10の国際連携機関の代表者を招待し、代表者が各々の機関についてプレゼンテーションをおこなう際、舞台上で印南は、逐次通訳を担当し、連携と信頼の強さをアピールした。その後も、7月には上記アンギャン=レ=バン市で開催された「ヨーロピアン・ビジネスネットワーク・コングレス2017[11)]」に招待を受けて参加した。ナレッジキャピタル・総合プロデューサー野村卓也氏のプレゼンテーションに引き続き、印南は、国際化をテーマとするパネルディスカッションに登壇している。9月にはポーランド・ワルシャワで開催された「デジタルカルチャー・カンファレンス2017[12)]」に招待・参加し、10月にはタイ・バンコクで開催された「クリエイティブハブ＆シティー・フォーラム[13)]」にも同様に招待を受けて参加している。現在も「双方向言語運用能力」を備えた「高度汎用力」の実践者として、国際連携・主担当として、各プロジェクトの企画・運営業務を遂行している。

3　多言語・多文化コミュニケーションを考える

さて、多言語・多文化コミュニケーションの媒介役には、注意深く相手の発話に耳を傾け、素早くその本質を捉え、それを瞬時に翻訳し、的確にもう一方の相手に伝える技術（高度汎用力）が要求される。通訳者としての役割だけでなく、そのコミュニケーションから新たな関係性を生み出す「（多言語・多文化）コミュニケーター」にとっては尚更要求される高い技術力である。一方の言語をもう一方の言語に通訳・翻訳する外国語運用能力（語学力）はもちろん、商談等で成果を出すためのプレゼンテーション力も同じく重要なのである。言語の変換を記号的に処理するだけの橋渡しでは、両者の間に「信頼感を醸成する」関係性を生み出すことには繋がりにくい。一方のメッセージを、まずは自分ごと（または自分たちごと）として受け止め、もう一方へ主体的に発信する。相手への「寄り添い」こそが、「親近感を生み出す」関係性を構築する第一歩である。

実際にそう言ってしまうと、この関係性という言葉には実にビジネス的な響きがあるが、ビジネスに限らずあらゆる物事は人と人との関係性の上に成り立っていることを思えば、決して無視はできないのである。

これまでの所謂「通訳」の基本的な姿勢には、発話者の言葉には「何も足さない、何も引かない」という考え方が一般的に原則である。あらゆる意味での誤解を避けるために、記号的変換に徹するべきだという考え方も、確かに成立している。しかし、それだけではコミュニケーションに生じる根本的な隔たりを埋めるには不十分な場合が多いことも事実である。今では通訳者が「通訳」としての役割を「事務的」に果たすこと以上に、より緊密な社会的コミットメントが求められる場面が増えてきている。医療通訳や司法通訳などはその最たるものである。だからこそ、これからはコミュニケーションの媒介役として、「通訳」の付加価値を高めることが必要だろう。ならば「通訳」ということばを別のことばで置き換えて、「超」通訳的な存在を定義してもよいはずである。その鍵を握るのが、双方向言語運用能力、すなわち高度な外国語運用能力において、受動的な理解力（passive-inductive comprehension）と能動的な表現力（active-deductive expression）を同水準で備えていることである。

4　母語におけるコミュニケーション能力の不可欠性

これまで、外国語による「交渉」について見てきたが、双方向言語運用能力の重要性は外国語の運用能力においてばかりではない。分野の垣根を越えて交流が盛んになり、イノベーティブ人材の需要が高まっている近年、コミュニケーション能力の問題が世の中でも多く取り沙汰されている。そんな中で、むしろ母語におけるコミュニケーション能力向上を目指す人材の育成も、この双方向言語運用能力のあり方に根差して見直されるべきではないだろうかと感じる。母語の基盤としてまず重要なのは、傾聴能力

（聴く力）、文脈理解能力（読み解く力・感受性豊かな吸収力）、そして最後に演繹的表現力（伝える力）である。これらを身に付けない限り、いかに外国語の文法を習得し、語彙を増やそうとも、その外国語がコミュニケーション・ツールとして十分に効果を発揮することは難しいだろう。それに、母語と外国語、それぞれの運用能力の形成は、本来別の話ではない。外国語の運用能力は、母語の運用能力の大きな下支えを以って初めて成り立つものであるからだ。

また、医療・司法・科学技術等の専門性については、コミュニケーション能力の観点から言えば、そのさらに次段階の知識（上部構造）で、これも外国語の運用能力の下支え（下部構造）の上に成り立つと言ってもよい。また、高度な交渉においては、特に外国語による文脈理解能力が問われるため、母語による文脈理解能力に加えて、その重要性を認識しておくべきだろう。

5　まずスクライビング・スキルを身に付けよう

国際化への需要に逼迫され、外国語教育の手法もつい表層的な施策に頼りがちだが、多言語・多文化社会における真のグローバル人材、イノベーティブ人材の育成は、他ならぬ母語の運用能力の涵養を出発点とするものである。ここで、母語の運用能力を鍛えるための訓練方法の一つとして、スクライビングという手法を提案したい。

本来スクライビングとは、講演や会議等の場で、それぞれの話者の発話内容や要旨を、同時進行的にホワイトボード等に板書してまとめる手法のことで、発話や議論の可視化ツールとして多くの場面で活用されている。その効果として、例えば講演などの最中や終了後に、聴衆が話の全体構成を俯瞰したり、個別の話題に注目し、臨場感、傾聴体験を深めることができる。また会議の席では、発言内容や議論の流れを辿り、共通認識を構築することによって、全体の関係性を整理することができる。ここで注意しておきたいのは、スクライビングはあくまでも話の内容を「まとめて表現すること」であって、内容を片言隻句も聞き漏らさぬ「速記術」のことではない。端的に言えば、話を聞きながら手元で取るメモを他者にも公開することなのだが、メモとは言え、他者がそれを見て（読んで）理解のできることがもちろん前提である。必ずしも細部まですべての情報を網羅する必要はないが、発話や議論の全体構成と主旨、結論などの的を射ることが肝心である。

スクライバー（スクライビングする人）には、聞いた話を瞬時に咀嚼する理解力と、理解した内容を体系的にまとめ上げる構成力と、実際に分かりやすく筆記する表現力が要求される。

まずは、**よく聴くこと**。発話の内容を傾聴し、正しく理解すること。言語表現としての理解はもちろん、その背景にも目を向けながら、一つ一つの情報を丁寧に自分のものにすることである。

それから、**組み立てること**。個々の要素の関連から全体を把握すること。目下の発話が、全体の中でどの位置にあるのかを常に意識し、文脈を正確に汲み取ることである。

最後に、**形にすること**。傾聴し構成した内容を他者に伝えるために共有すること。テキストやグラフィックなど、その都度最適な手法を使って情報を記述することである。スクライビングは、母語において重要なこれらの3つの能力を駆使して初めて完成されることになる。

また、同時性とアナログ性についても忘れてはならない。この手法の最大の特徴とも言える**同時性**は、スピーディーな情報処理能力を鍛えることに大きな利点がある。それを手書きで板書する**アナログ性**には、話し言葉だけに頼らない言語運用能力、すなわち「話し言葉」と「書き言葉」が両立する運用能力の涵養を可能にする[14)]。

6 さいごに

社会の変化とともに、コミュニケーションのあり方にも大きな変化が生じている。多言語・多文化コミュニケーター、あるいはコミュニケーション・デザイナーは、国際社会でますます求められる人材・能力となることだろう。双方向言語運用能力を備える人材の育成、そして社会における計画的な登用に向けた土壌作りが喫緊の課題である。

参考文献：

インターネット資料

ナレッジキャピタル：https://kc-i.jp/

林田雅至（2011）「序論：日本社会の外国人疎外感を緩和・阻止せよ!」『Communication-Design』5：21-30.　http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/bitstream/11094/4701/1/cdob_05_021.pdf

同（2016）「目指せ!多言語コミュニケーション・デザイナー」『Communication-Design 2005-2015』（10周年記念刊行）：108-117.

同（2017）「医療通訳（医療言語学によるイノベーション）はグローバル社会との「共創」によって世界の扉を開く」『Co*Design』1：85-102.　http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/handle/11094/60555

同（2017）「序論：Interactive competenceの観点から『日葡辞書』（1603-1604）の現代語化を考える」『Co*Design』2：59-69.　https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/65081/cod_02_059.pdf

関連：ISO 13611 Interpreting - Community interpreting - Guidelines（Published December　2014）: https://www.iso.org/obp/ui/#iso:std:iso:13611:ed-1:v1:en

註：

1）大阪大学外国語学部ポルトガル語科2012年度卒、2013年ナレッジキャピタル開業の時から「コミュニケーター」として就職し、約3年間で高度交渉力（高度汎用力）が要求される国際連携交渉などプロフェッショナルの立場から、交渉通訳を100件以上実践し、本文で言及する多言語・多文化「コミュニケーター」、多言語コミュニケーション・デザイナー（林田）を確立しようと試みている。旧CSCD・コミュニケーションデザイン科目「多文化サポート概論」改めCOデザインセンター「リテラシー論」及び、大阪大学国際・未来医療学講座「健康・医療イノベーション学」Ⅱ, 授業科目「国境を越える医学・医学教育」を藤野美香氏（COデザインセンター：2018年度招へい研究員）とともに授業分担。旧CSCD10周年記念刊行物（下記）に彼に言及：http://ir.library.osaka-u.ac.jp/web/CSCD/volume/cscdt1.html
http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/bitstream/11094/55655/1/cdob_t1_108.pdf

2）ナレッジキャピタル　コミュニケーター：https://kc-i.jp/communicator/

3）NICT（欧州との連携による日欧共同公募第2弾の研究開発を開始）：https://www.nict.go.jp/press/2014/10/16-1.html

4）アルスエレクトロニカ・フェスティバルへの出展：https://kc-i.jp/Content/299

5）バン・ニュメリックへの出展：https://kc-i.jp/Content/386

6）アルスエレクトロニカ・フェスティバルで「こたつ会議」を開催：https://kc-i.jp/Content/413

7）ヤング・リーダーシップ・プログラム：http://www.osaka.cci.or.jp/event/seminar/201607/D11160919026.html

8）日仏イノベーション・イヤー・フォーラム：
http://www.kouiki-kansai.jp/contents.php?id=2618

9）フランス原子力・代替エネルギー庁とMOUを締結：https://kc-i.jp/Content/448

10）アワードシティ・ウィークエンド：https://kc-i.jp/activity/award/acw2017/

11）EBN Congress 2017：http://ebncongress.eu/

12）デジタルカルチャー・カンファレンス2017：http://digitalcultures.pl/en

13）クリエイティブハブ＆シティー・フォーラム：https://www.britishcouncil.or.th/en/programmes/arts/upcoming-ongoing-activities/regional-forum-creative-hubs-and-cities

14）ナレッジサロンで開催された木曜サロン「グローバル医療・健康管理をめぐるランゲージバリアフリー～ことばの壁を越える～」（林田）における、印南による「スクライビング」を具体例として下記参照：https://kc-i.jp/activity/salon-event-report/thursday-salon/20170720/

（投稿日：2017年11月27日）
（受理日：2018年1月10日）